

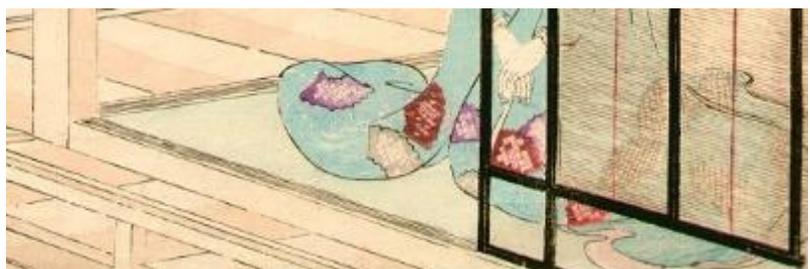
6

「表御 \times 切」で文芸や芸能を楽しむ

松栄院（浅姫）が当時大人気だった講釈師伊東燕凌（1801-55）の軍談を好んだことを、春嶽（慶永）は次のように回想しています。

毎月一度ずつ公（松栄院）をお招きして、表住居（男子のみの場所なり）を \times 切にして、簾屏風を立ててその中に御褥を敷き、お聴きいただいた。燕凌は御簾の外で2・3間離れて軍談を行った。（中略）また御付の老女はじめ女中も傍聴し、その左右にも粗末な簾を掛け、浅姫御住居や手前の女中も傍聴した。男子では浅姫の用人、御用達、その他側向頭取、小姓、奥の番も傍聴した（『真雪草紙』現代語訳）。

このように「表御 \times 切」によって奥向をしめ切り、御簾や簾屏風による囲いを設けることで一時的にジェンダーの制約をこえて、慶永・松栄院・それぞれの女中・松栄院付用人・慶永付側向役人ら男女がともに軍談を楽しんでいたことは、「少傅日録抄」からもわかります。



御簾と簾屏風『千代田の大奥』国立国会図書館デジタルコレクション